

持続可能な社会づくりを担う児童の育成

～ESDの視点で考える社会科学習指導の工夫を通して～

豊見城市立上田小学校教諭 赤嶺英幸

I テーマ設定の理由

近年、地球温暖化による集中豪雨や砂漠化、森林破壊による生態系の変化や絶滅といった環境問題、貧富の格差、偏見や差別による人権問題等、多くの問題が顕在化している。このような諸問題は、私たちの日常生活とも密接にかかわっており、これからの教育や社会生活において、一人一人の行動変容や価値変容していくことが求められている。そんな中、2015年国連において「持続可能な開発目標」（以下、「SDGs」）が採択され、17の目標と、それぞれの目標を構成する169のターゲットに対し、すべての国が「誰ひとり取り残さない世界の実現」に向け共通して取り組みを行っている。さらに、SDGs達成を実現するためには「持続可能な開発のための教育」（以下、「ESD」）がその一つの方策として重要な役割を果たすと言われ、これからの社会を生きていく児童が直面するであろう「正解のない課題」の解決に向けて「自分には何ができるのか」を考え、行動する資質・能力を育成することが必要不可欠である。また、学習指導要領では前文及び総則に「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられており、各教科等においても関連する内容が盛り込まれた。学習指導要領において示された資質・能力の育成を着実に進めるため、ICTを最大限に活用しながら「主体的・対話的で深い学び」につながるような、「個別最適な学び」や子ども達の多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実が求められている。

私自身、これまでの実践を振り返ってみると、金銭教育の共同研究で「もったいない」を合言葉に、食品ロス問題やごみ問題、世界の環境問題について社会科や総合的な学習を通して問題解決型学習に力を入れ取り組み、児童が身近な問題として捉えられるよう心掛けながら授業展開を行ってきた。しかし、教師主導の授業展開になってしまったことや、思考を揺さぶるような「発問」が不十分だったことで、児童は「言われたとおりにやらされている」と感じてしまい「調べたい・やってみたい」といった興味・関心を高められず、自分ごととして考え・表現するような児童の育成に課題が残った。

そこで本研究では、ESDの視点「多様性（いろいろある）、相互性（関わり合っている）、有限性（限りがある）、公平性（一人一人を大切に）、連携性（力を合わせて）、責任性（責任をもって）」を教師が意識しながら授業展開を行い、社会科の授業で習得した知識が持続可能な社会づくりにどう生かせるのか、生かされているのかなど、思考を揺さぶる「発問」を常に問いかけ、生み出された「問い」に対し児童の探求し解決しようとする関心・意欲の向上を図っていきたい。また「個別最適な学び」を実現していく方法として「自由進度学習」を取り入れ、子どもを主語にした授業展開を行う。さらに、タブレットなどのICT教材を活用した指導の個別化・学習の個性化といった指導の工夫を取り入れ、自身の学習を調整しながら考え、探究し、仲間と協働的な学びにより、ESDの資質・能力が育まれ「持続可能な社会づくりを担う児童の育成」につながるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

- 1 SDGs達成に向けて主体的に学んでいく手立てとしてのESDの推進と個別最適で協働的な学びの研究を深める
- 2 ESDの視点を取り入れた学習指導を促進する社会科学習の実践と考察

Ⅲ 目指す児童像

学習を調整しながら考え、探究し、仲間と協働的に学び ESD の資質・能力を育くむ中で、自分の価値観や行動が変容できる児童

Ⅳ 研究の方法

- 1 ESD の教育的意義と「個別最適で協働的な学び」の一体的な指導の先行研究
- 2 ESD の視点を取り入れた社会科の「自由進度学習」の実践

Ⅴ 研究の内容

1 「持続可能な社会づくりを担う児童」を育成する ESD

(1) SDGs 達成を実現するための ESD とは

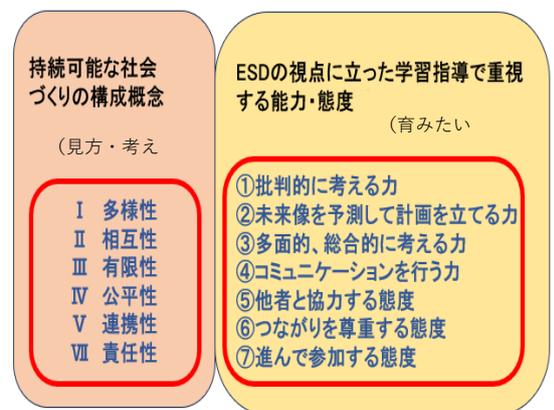
ESD とは Education for Sustainable Development (持続可能な開発のための教育) の略で、2000 年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で我が国が提唱した考え方であり、地球規模の課題を自分ごととして捉え、その解決に向けて自ら行動を起こす力を身に付けるための教育のことである。2015 年 9 月の国連サミットにおいて「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が採択され、SDGs が掲げられるようになった。これは 2016 年から 2030 年までの国際目標で、貧困や飢餓、エネルギー、気候変動、平和的社会など、持続可能な世界を実現するための 17 の目標と 169 のターゲットから成り、ESD は、この中の目標 4「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」のターゲット 4.7 に位置付けられた。また、2017 年の国連総会決議では、「持続可能な社会の創り手を育成する ESD は、持続可能な開発目標に不可欠な要素であり、その他全ての持続可能な開発目標の鍵」であることが確認されている。つまり、図 1 に示すように ESD は、持続可能な社会の担い手づくりにおいて 17 すべての目標の達成に貢献するものとして確認されている。そして、学習指導要領の前文や総則においては「持続可能な社会の創り手の育成」を念頭に置いた表現と、各教科・領域において ESD に関連する内容や記述が数多く盛り込まれている。したがって、ESD を推進することは、学習指導要領の理念の実現に迫ることになり、学校の教育課程全体で取り組むべきものと位置づけられる。



図 1 SDGs の実現に貢献する ESD (文科省)

(2) ESD で育成したい能力・態度について

ESD によって育む能力・態度については、国立教育政策研究所の「学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究 [最終報告書]」の中で、「持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力・態度を身に付ける」と示している。こうした考えに基づき、ESD の視点で考える学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組みとして提案したものが『持続可能な社会づくりの構成概念』や『ESD の視点に立って重視する能力・態度』である (資料 1)。ESD を各教科等の学習活動において推進す



資料 1 ESD で育成したい能力・態度 (国立教育政策研究所)

る上で、ESDの視点「多様性（いろいろある）、相互性（関わり合っている）、有限性（限りがある）、公平性（一人一人を大切に）、連携性（力を合わせて）、責任性（責任をもって）」を教師が意識しながら授業展開を行い、重視する能力・態度の育成をねらいながら授業計画を行っていくことが、児童に持続可能な社会づくりの担い手としてふさわしい資質や価値観を養うことに繋がると考える。そこで本研究においても、社会科の単元内容に応じてESDで重視する能力や態度の中から特に伸ばしたい力を選び、それらを意識した授業計画を行っていく。

(3) ESDで育む「持続可能な社会づくりを担う児童」とは

地球規模の課題や新たな社会の姿 Society 5.0 など著しく変化する時代において、持続可能な社会を自ら創造することができる資質・能力を身に付けていくには、児童たちの学びが「主体的・対話的で深い学び」となることが重要とされる。学習指導要領総則（以下、「総則」）には、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善において、「児童が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。」と示されている。本研究では、児童が主体となって学習に取り組みたくなるような「個別最適で協働的な学び」の工夫を加えながら学習展開を行う。また、児童が学習に興味・関心を持って主体的に取り組む態度と、学び続ける意欲を生み出す授業になるように、ESDの視点で考える社会科の「自由進度学習」を取り入れた授業展開の工夫を図る。このように授業改善を実践していくことで、ESDの資質・能力が生まれ「持続可能な社会づくりのため自分に何ができるのか」というような、自分ごととして価値観や行動を変容しようとする「持続可能な社会づくりを担う児童」の育成を目指していく（図2）。



図2 ESDで育む「持続可能な社会づくりを担う児童」
榊原範久（2020）を基に赤嶺作成

2 「ESDの視点で考える社会科学習」を展開するためのアプローチ

(1) 個別最適な学びにおける「指導の個別化」と「学習の個性化」

中央教育審議会（令和3年）では、個別最適な学びについて「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理され示されている。「指導の個別化」は「子ども一人ひとりの特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供設定を行うこと」とある。「学習の個性化」は「子どもの興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、教師が子ども一人ひとりに応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子ども自身が学習が最適になるよう調整すること」とある（図3）。本研究では、「自由進度学習」を取り入れ、「指導の個別化」により児童が学習進度を選択できるようにし、「学習の個性化」として学び方を選択できるようにする。教師は、検証授業導入の際に学び方の選択肢（学習計画表、ミライシート、ノート、ワークシート等）と表現方法の選択肢（工作、壁新聞、オクリンク、その他）を提示する。このように、学習の見通しを立てることで、自らの学びを調整していく。



図3 個別最適な学び（文科省）

(2) 自由進度学習

自由進度学習について、難波（2023）は「授業の『進度』を、子ども一人ひとりに任せ、各自が自分に最適だと考える学習計画を考え、自らの判断と責任で『自由』に『学習』していく授業手法」と述べている。本研究では、個別最適な学びとして一人一人の興味・関心とペースで選択しながら学べるように「自由進度学習」に取り組む。自由進度学習に取り組むことで、学習ペースを自分の責任で調整し、理解に時間がかかる児童はじっくり考える時間を確保できるようにし、はやい児童は時間を持て余すことなく新たな疑問点や探究したいことなどを見いだすことができるようにする。自由進度学習に取り組むことで、社会的事象を理解したことに基づいてさらに主体的に学ぼうとする姿を目指していく（資料2）。

子どもの メリット 6選	1: 自分で考える力が身につく
	2: 自分に問いかける習慣が身につく
	3: 高いモチベーションで学びに向かう経験を重ねることができる
	4: 計画を立てる癖、見直しをもつ癖がつく
	5: 自制心が鍛えられる
	6: 自分から行動を起こすのが当たり前になる
先生の メリット 6選	1: 子どもたちと対話できる時間が多くある
	2: 学習評価をその場で行い、即フィードバックができる
	3: 子どもたちの「学習力」に目が向くようになる
	4: 子どもたちの特性を考えられるようになる
	5: 管理ではなく、支援としての立場が取りやすい
	6: 単元を見通した長期的な計画を立てる習慣がつく

資料2 自由進度学習のメリット
（難波 2023）

(3) 協働的な学び

授業づくりにおいては「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくことが重要である。協働的な学びでは、自分の考えと他者の考えを批判的・多面的・多角的に比較・検討したり、他者と協力しコミュニケーションを図ったり、お互いを尊重する等、ESDの視点に立った学習指導で重視したい能力・態度を育成するために必要な学びである（図4）。これまでは、教師主導で共有の時間を設定していたことや、話し合いの意図を明確にしないまま行わせることにより中途半端な深まりのない共有となっていた。そこで、本研究における協働的な学びでは「自由進度学習」を行う中で、児童自身が必要なタイミングで児童同士や教師と対話ができるようにする。また、話し合う際には相手の意見をしっかりと聞こうとする「話し合いのルール」（資料3）を大切にし、その対話によりESDで育むべき資質・能力を身に付けることができるようにする。

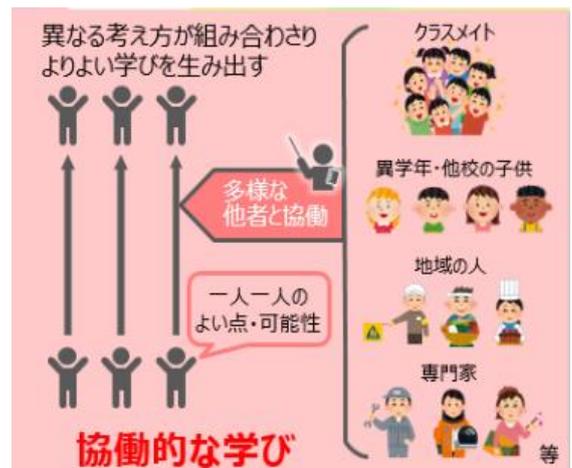


図4 協働的な学び（文科省）

あいづち名人	聞き方名人	話し方名人
あ ああ、なるほど	あ 相手を見て聞く	あ 相手に聞こえる声で話す
い いいね、その考え	い 意味を考えて聞く	い 急がずゆっくり話す
う うん、わかった	う うなずきながら聞く	う うつむかないで話す
え え！ そうなんだね	え 笑顔で聞く	え 笑顔で生き生きと話す
お おお！ すばらしい	お 終わるまで聞く	お 終わりまで話す

資料3 話し合いのルール

(4) ESD の視点と社会科学習のつながり

広島大学名誉教授の中山修一氏によると「持続可能な社会の構築には、価値観の転換が必要である（価値観の転換とは、具体的には、大量消費・大量生産・大量廃棄を善とする社会観を、持続可能な生産・消費・廃棄を善とする社会観へ転換する）」とされている。このことから、今までの生活スタイルを持続可能な社会に変えることができる価値判断力や行動力を身に付けることが重要であると考えられる。本研究では、ESD の視点で社会科の問題解決型学習を実践していく中で、様々な社会的事象と出会い、学習課題に対する答えを導く過程においてどのような価値判断をしていけばよいか、児童に考えさせるような「発問」を大切にし、探究しようとする意欲を向上させたい。また、ESD の視点で社会科を学ぶことによって、人と人との関わりや、多くの資料との出会い、根拠となる事実を基に自分の考えをもつことになるが、協働的な学びの中で、自分と同じ考えであっても根拠となる事実には多様な見方・考え方が存在することに気付くことで、批判的・多面的・総合的な見方・考え方ができるようになると考える。このような社会科の実践していくことで、ESD の資質・能力が育まれ「持続可能な社会づくりのため自分に何ができるのか」というような、自分ごととして捉え価値観や行動を変容しようとする「持続可能な社会づくりを担う児童」の育成につながると考える。

VI 研究の実際（授業実践）

- 1 大単元名 「日本の歴史」
- 2 小単元名 「国づくりへのあゆみ」（教育出版6年）
- 3 単元設定の理由

(1) 教材観

本単元は、狩猟・採集や農耕の生活、古墳、大和朝廷（大和政権）による統一の三つの現象を手掛かりに世の中の様子がむらからくにへと変化したことを理解することをねらいとしている。「縄文時代」と「弥生時代」は米づくりを中心に大きく違っており、「衣食住の違い」「人々の行動の違い」「古墳の大きさの違い」など比較して考える力の育成に適した単元である。さらに、「自由進度学習」の授業展開を取り入れ、児童が未来の創り手として、歴史への興味や関心を高め、学び方を自ら調整しながら主体的に歴史学習に臨めるようにする。

自由進度学習では、縄文と弥生と古墳それぞれの時代を、児童が自身で学習計画を立てながら追究活動を行い、各時代の生活の様子について調べ・まとめ・共有することで、大昔の生活の変化について意欲的に学ぶことができると考える。

(2) 児童観

本学級の児童は「協働的な学び」を重視した学習展開に慣れ親しんでいるため、友達と協力して学習に取り組むことが好きな児童が70%と多く、社会科の学習に対して意欲的な児童が多い。本単元では、人々の暮らしの変化を通して狩猟・採集文化から稲作文化への移行や、古墳の広がりや大和朝廷（大和政権）の出現など「むらからくにへ」と社会の変化について学ぶことになるが、初めて日本の歴史を学ぶ児童も多く、身近な生活との具体的な関わりが見えないものや抽象的な内容であることと、課題解決のために必要な資料を集めることができる児童が40%に満たないことから、苦手意識や関心意欲の低下がでてくると予想される。そのため、自由進度で自分の興味関心の高い内容から追究活動を行い、協働的な学びを通してお互いに分かったことを共有し合いながら、学びを深めていきたい。また「多様性（いろいろある）、相互性（関わり合っている）、有限性（限りがある）、公平性（一人一人を大切に）、連携性（力を合わせて）、責任性（責任をもって）」など、これからの未来を考えるという連続性や関連を意識させる「発問」を取り入れた授業展開を心がけることで、ESD の能力・態度も育んでいきたい。

(3) 指導観

歴史指導の導入では、既習事項を生かして現在の選挙制度を約100年前の選挙の様子と比べ、社会の在り方や暮らしに関わる制度が変わってきていることが歴史を学ぶことで見えてくる重要な学習であることを児童に意識させたい。また、縄文時代・弥生時代・古墳時代の想像図の読み取り・比較を通して「なぜ違うのか」という理由を意識させながら考えさせていきたい。さらに、生産手段が変化していることや、人々の暮らし集団形成の変化、古墳の広がり、大和朝廷が全国の豪族を従えたことを捉えさせたい。

本単元では、学ぶ意欲を促すために授業を自由進度学習で行い、自分のペースで学習を進められるようにする。自由進度学習を行う5時間の中で3つのコースに分かれ、自由に学習計画を立てながら縄文時代や弥生時代、古墳時代について学習していくことを確認する。その際に、必ず5時間で全ての時代の学びを完成させ、表現・発信ができる状態にすることを約束し、スペシャル問題を設定することで学びをさらに発展させていきたい。また、協働的な学びとして「縄文・弥生・古墳どちらの時代に住みたい？住みたくない？」を紹介するパフォーマンス課題を設定し、それぞれの時代の特色、暮らし、社会の様子を自分が選んだ時代を紹介するワークシートやポスター、ミニ新聞などの成果物を活用しながら、お互いに批判的・多面的・総合的な見方・考え方で共有したりすることを通して、ESDで育みたい能力・態度を高めていきたい。

4 単元の指導目標

(1) 単元の目標

知識及び技能	大昔の日本でむらからくにへと変化したことについて理解するとともに、遺跡や文化財、地図帳や年表などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切に調べまとめる技能を身につけるようにする。
思考力・判断力・表現力等	縄文時代、弥生時代、古墳時代の特色、出来事や人物の関連や意味を多角的に考える力、その時代の社会に見られる課題を把握して、歴史を学ぶ意味を考える力、考えたことを説明したり、それらをもとに議論したりする力を養う。
学びに向かう力・人間性等	大昔の日本の暮らしについて、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、日本の歴史や伝統を大切に国を愛する心情を養う。

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> 世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などについて、遺跡や文化財、地図帳や年表などの資料で調べ、必要な情報を集め、読み取り、狩猟・採集や農耕の生活、古墳、大和朝廷による統一の様子を理解している。 調べたことを年表や図表などにまとめ、むらからくにへと人々の生活が変化したことを理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> 世の中の様子、人々の働きや代表的な文化遺産などに着目して、問いを見だし、狩猟・採集や農耕の生活、古墳の様子、大和朝廷による統一の様子について考え、表現している。 狩猟・採集や農耕の生活の様子、古墳の広がり、国家の統一の様子を関連付けたり総合したりして、この頃の世の中の様子を考え、適切に表現している。 	<ul style="list-style-type: none"> 狩猟・採集や農耕の生活の変化について、予想や学習計画を立てたり、学習を振り返ったりして、主体的に学習問題を追究し、解決しようとしている。

5 単元の指導計画・評価計画（全9時間）

方法	○主な学習活動	・指導の留意点	評価規準【観点】(方法)
学習問題をつかむ(2時間)	○「狩りや漁をしていたころの様子」や「米づくりが広まったころの様子」の想像図を読み取ったり、比較したりして、気付いたことや疑問点について話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・大昔の人々が、狩りや漁、採集を行って暮らしていたことや、そうした暮らしの様子が変化していったことを押さえる。 ・疑問点を見つけることを、児童に意識づけてから資料を見る。 ・オクリンクを活用して、児童の意見を可視化する。 	【思判表】想像図を読み取ったり、比べたりする中で、その様子の違いから疑問を持ち、人々の暮らしの変化やその要因を考え、表現している。(発表、ノート、タブレット)
	○大昔の人々の暮らしの変化について学習問題を立て、学習計画を立てる。	<ul style="list-style-type: none"> ・NHK for schoolを用いて「縄文時代」や「弥生時代」の歴史的展開や暮らしの変化についておおまかに押さえる。 ・オクリンクを活用して、児童の意見を可視化する。 	【思判表】人々の暮らしの変化について問いを見いだし、学習問題として表現している。(発表、学習計画表、タブレット)
学習課題：大昔の人々の暮らしは、どのように変わっていったのだろうか。			
調べる(5時間)	○「縄文時代」「弥生時代」「古墳時代」の特色、出来事や人物について、自分で学習計画を立て調整しながら調べる。	<ul style="list-style-type: none"> ・自由進度学習として縄文時代、弥生時代、古墳時代について、各時代のワークシートをもとに学習していくことを確認する。また、単元のゴールとしてのパフォーマンス課題を提示する。その際に、必ず5時間で自分の学びを完成させ、表現・発信ができる状態にすることを約束する。 	【態】学習問題について学習計画を立て、主体的に追究しようとしている。(発表、学習計画表、行動観察)
	縄文時代コースの調べる事例：狩りや漁・採集、三内丸山遺跡、竪穴住居、縄文土器、土偶、矢じり、人々の食べ物		
	弥生時代コースの調べる事例：米づくり、青銅器、鉄器、弥生土器、農耕具(石包丁、田げた)、人々の食べ物、吉野ヶ里遺跡、吉野ヶ里遺跡からの出土品、むら、指導者(首長)、豪族、くに、邪馬台国、卑弥呼		
	古墳時代コースの調べる事例：古墳、前方後円墳、古墳づくり、渡来人、大和朝廷、大王(おおきみ)、古事記、日本書紀		
スペシャル問題に挑戦しよう			

考え・まとめる(2時間)	協働的な学び	パフォーマンス課題：どちらの時代に住みたいか・住みたくないか考えを表現しよう	
		<p>○「どちらの時代に住みたいか?」について、<u>選んだ理由</u>を考え、意見交流で学びを深める。 (検証授業本時)</p> <p>○「どちらの時代に住みたくないか?」について、<u>住みたくない時代の課題</u>を見つけ、意見交流で学びを深める。</p> <p>○それぞれの時代の課題を解決する方法を考える。</p>	<p>・ESDの視点(公平性、連携性、責任性)を働かせながら、選んだ理由をSDGsの目標と関連付けながら書かせ、意見交流させる。</p> <p>・選んだ理由を「正しい」「正しくない」で批判し合うことに執着させないよう、担任はファシリテーターとして、ESDの視点(公平性、連携性、責任性)で意見交流ができるように配慮する。</p> <p>・どうすればもっと良い時代になっていただろうと考える過程を、これからの生活に生かせるようにする。</p>

6 本時の指導(8/9時間)

(1) 本時の目標

ESDの視点(公平性、連携性、責任性)を働かせながら、狩猟・採集、米づくりや古墳づくりの広まりと人々の暮らしや社会の変化を関連付けて考え、表現することができる。

(2) 本学習で働かせるESDの視点(見方・考え方)

【公平性】: 大昔の人たちの生活を知ること、自然からの恩恵を享受することや基本的な権利を守ることの大切さを理解し、未来へ繋いでいこうと考えること

【連携性】: 縄文・弥生・古墳時代の暮らしや社会の様子の変化について、知っていることを共有し学びを深めること。

【責任性】: 過去の歴史を学ぶことで、平和でより良い社会を未来へつなげていくために、自分に何ができるのかに気づき行動すること。

(3) 本学習で育てたいESDの資質・能力

【批判的に考える力】: 縄文・弥生・古墳時代それぞれの良さや課題について、自分の考えを見つめ直す。

【多面的・総合的に考える力】: 協働的な学びを通して、お互いの考えを比較しながら考える。

【コミュニケーションを行う力】: 既習内容を生かしながら「どの時代に住みたいか」について、自分の考えを相手に伝える。

(4) 本学習で変容を促すESDの価値観

- ・世代間の公正
- ・お互いの人権、文化を尊重すること

(5) 達成が期待されるSDGs

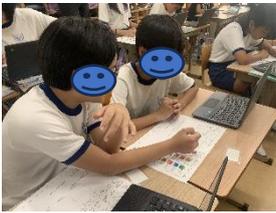
目標10: 人や国の不平等をなくそう

目標11: 住み続けられるまちづくり

目標16: 平和と公正をすべての人に



(6) 本時の展開

	○学習活動 ・児童の反応例	◇指導の留意点	評価規準【観点】(方法)
導入	○前時までの学習を振り返る。 ○本時のめあてを確認する。	◇教科書や資料集の想像図等の資料を提示する。	
めあて：縄文時代と弥生時代と古墳時代、どちらの時代に住みたいか考えを伝えよう。			
展開	○縄文時代と弥生時代と古墳時代の生活の仕方について振り返る。 ＜縄文時代＞ ・狩りや漁、採集、縄文土器、大型竪穴住居、大型堀立柱建物、など。 ＜弥生時代＞ ・米づくり（田おこし、収穫、脱穀） 青銅器や鉄器、道具や布の製作、首長、豪族、争い、など。 ＜古墳時代＞ ・古墳づくり、渡来人、大和朝廷、大王、日本書紀、古事記、など。 ○どちらの時代で生活をしたいか、理由や根拠を付けてオクリンクに表す。	◇カフト問題（縄文～古墳時代まとめ編）に取り組みせ、各時代の生活や社会の様子をふりかえる。 ◇衣食住、社会の様子観点で時代を比較させ、選んだ理由をSDGsの17の目標と関連させながら考えさせる。 ◇机間巡視をして、理由を書くことに支援の必要な児童には、教科書の生活の仕方に特徴のある絵に着目させたり、ワークシートで学習した内容を振り返ったりさせながら書けるように言葉かけをする。 ◇選んだ時代によってオクリンクのカードの色を変えるよう伝える。 縄文時代：黄色、弥生時代：水色、古墳時代：黄緑	 【思考・判断・表現】縄文から古墳時代までの人々の生活の様子についてSDGsの17の目標と関連付けながら考え、衣食住や社会の様子観点から具体的に理由を表現している。（オクリンク、発言）
まとめ	○時代を選んだ理由や考えを共有する。（グループ→全体） ・縄文時代は争いがないから。SDGs 16番の平和と関係している。 ・弥生時代は食料が安定している。SDGs 2番の飢餓をなくそうと関係している。 ○次時の見通しを立てる。	◇どちらの時代に決め、なぜ選んだのかを理由や根拠を示しながら説明させる。 ◇自分の考えたSDGsの視点がどの領域（環境・社会・経済）にあたるのか、分類できるように支援する。 ◇次時は、選ばなかった時代の理由をSDGsと関連させて考えることを伝えておく。	

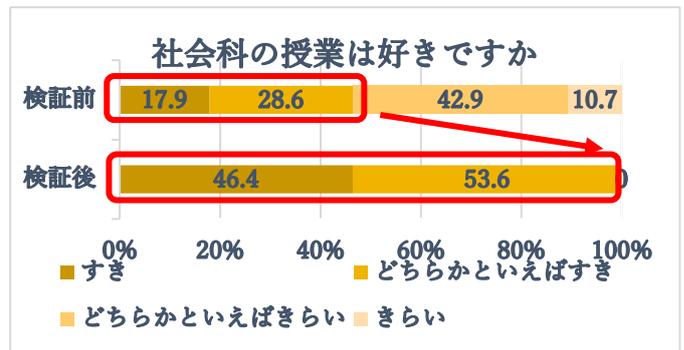
(7) パフォーマンスの評価規準（ICEルーブリック）

	I（個別の知識レベル） B 評価	C（関連付けられた知識レベル） A 評価	E（応用レベル） S 評価
評価規準	・縄文、弥生、古墳時代のワークシート全てに取り組み、それらを使って自分の考えを表現することができる。	・縄文、弥生、古墳時代のワークシート全てに取り組み、さらにスペシャル学習で自分がまとめたり作成したりしたものを使って、学習内容と関連付けながら説明や質問をすることができる。	・縄文、弥生、古墳時代のワークシート全てに取り組み、さらにスペシャル学習で自分がまとめたり作成したりしたものを使って、学習内容と関連付けながらどの時代についても説明や質問をすることができる。また、友達からの質問に対して、どの資料をみれば解決できるかなど、学び方や調べ方を伝えることができる。

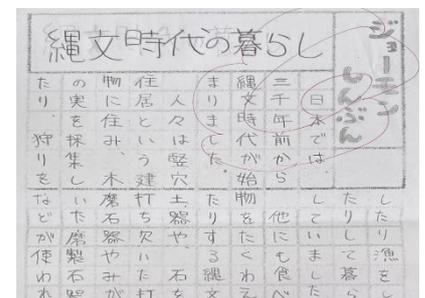
VII 研究のまとめ

1 個別最適な学びとしての「自由進度学習」について

導入時に、学習計画表やルーブリック評価の基準を児童に示し「自分で責任をもって学習を選択し、目標に向かって学びを調整する」ように指導を行った。個別最適な学びとして全9時間の中で5時間を「自由進度学習」として取り入れ、指導の個別化として「机間指導の徹底」や「ワークシート」「ミライシード」「スペシャル問題」の進捗によって、個別に声掛けや支援を行った。また、ふりかえりの視点において、学習内容とSDGsとの関連性を結び付けて書かせるように取り組ませてみた。今回、自由進度学習を取り入れたことで、社会科に対する苦手意識も無くなり、全ての児童が「好き」または「どちらかといえば好き」の回答結果となった(資料4)。当初、初めての取り組みということもあり、戸惑う児童が多く「学びの個性化」があまり見られなかったが、回を重ねるごとに、ロッカー付近で友達と集まって学び合う姿が見られたり、椅子の上にノートを置いてワークシートに取り組む児童が見られたり、それぞれが学びやすいスタイルを見つけながら取り組む姿が見られるようになった。児童Rは最初から「意味が分からない」と、課題に対して意欲が低かったが、「宿題にしても良いんですか？」と学習を調整しようとする声が聞かれ、このことを承認すると人が変わったように積極的になり、スペシャル問題にも取り組むことができていた(資料5)。



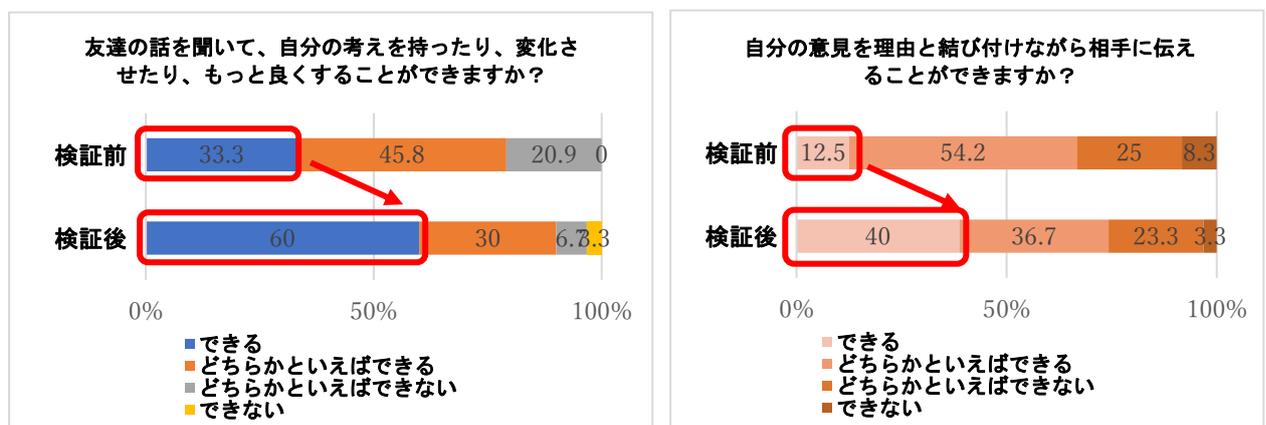
資料4 社会科に対する意識調査



資料5 スペシャル問題の作品

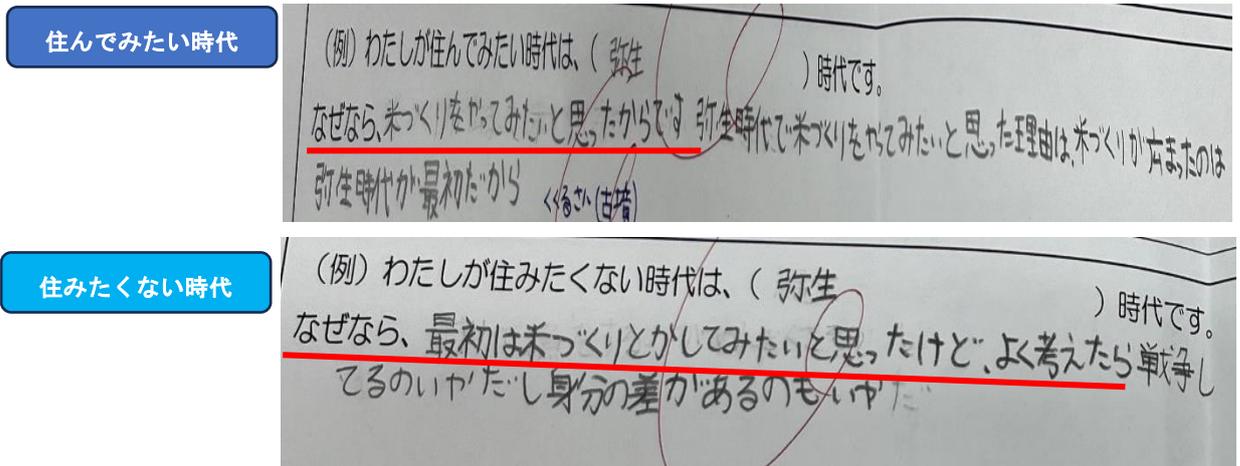
2 協働的な学びについて

自由進度学習における学び合いからも「協働的な学び」は見ることができたが、今回の单元ではパフォーマンス課題として「縄文・弥生・古墳時代、どちらの時代に住みたい・住みたくない」をテーマに、理由を考えSDGsの視点で解決方法を話し合う活動に取り組ませてみた。「弥生が良いよな！絶対に弥生だよな？」などと、児童の自然なつぶやきが聞こえてきて、すぐに意見交流が始まっていた。「住みたい理由」に関しては「米づくりが広まった」「技術の発達」「みんな平等な社会」など、SDGs



資料6 協働的な学びにおける児童の変化

とも結び付けて考えることができていた。また、話し合い活動を通して「友達の話聞いて自分の意見を持ったり、変化させて良くしたりすることができる児童」が、33.3%から60%へ向上していることや、「自分の意見を理由と結び付けながら相手に伝えることができますか？」のアンケートでは、「できる」と答えた児童が12.5%から40%へ向上していることから、ESDで育みたい「多面的・総合的に考える力」「コミュニケーション力」などを高めることができた^(資料6)。さらに「住みたくない理由」の話し合いでは、「住みたい」と言っていた時代の理由を見つめ直した考えが多く、このことはESDの「批判的に考える力」が身に付きつつあるように感じた^(資料7)。



資料7 考えを見つめ直した事例

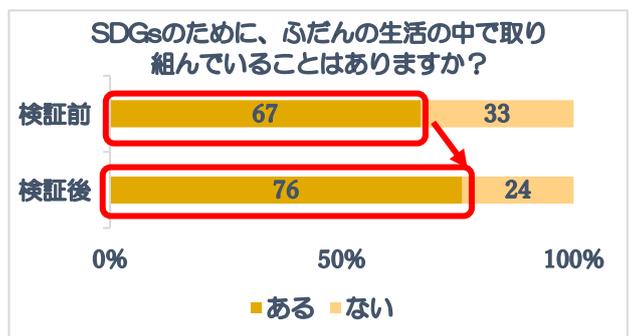
3 ESDの視点を取り入れた社会科学習の有効性

社会科の検証前のアンケートでは、SDGsを知らない児童は17%、普段の生活の中でSDGsを意識した行動をしている児童が67%だった。検証授業後のアンケートでは「SDGsの17の目標は大切だと思いますか？」の質問に対し、89.3%が「思う」、10.7%が「どちらかといえば思う」と全員が必要を感じていることが分かった^(資料8)。理由に関しても「今のままでは、将来世界がどうなるかわからないから」「大切に思う理由は、自分たちの環境、生活を見直すことができるからです」など、自分ごととして考えた意見が多く挙げられていた。また、SDGsの取り組みについても検証後は「取り組んでいる児童」が67%から76%へ向上していることから、SDGsに対する価値観や行動の変容に関しても良い結果となっている^(資料9)。

さらに、縄文時代から古墳時代にかけて「なぜ米づくりが広まったのか？」についてESDの視点で学習内容を見返しながらふりかえりを書かせてみたところ、SDGsの17の目標と調べて分かったことを見比べながら、SDGsとどのように関連しているかについて考え、多様な考え方をみることができた^(資料10)。また、友達のことを比較しながら自然と「何でそう思ったの？」と意見交流が始まり、多様な考え方を受け容れようとする姿も見られた。このことから、ESDの視点を取り入れた社会科の実践は「持続可能な社会の創り手」を目指した学習として効果があったといえる。



資料8 SDGsの必要性に関するアンケート



資料9 SDGsの取り組みについて

私は、米作りが始まったのかは、SDGsの2番が関係していると思います。なぜなら、狩りや漁だけだと十分に食べられない人もいたと思ったから、飢餓を少なくするために、米作りが始まったと思います。

私は、米作りが始まった、広まったのは、SDGsの14番と15番が関係していると思います。なぜなら、自然を守るために、米作りが行われたと思ったからです。

資料 10 SDGs と結び付けた多様なふりかえり

Ⅷ 考察

本研究の目標は、学習を調整しながら考え、探究し、仲間と協働的に学びESDの資質・能力を育くむ中で、自分の価値観や行動が変容できるかについて実践研究を行うことであった。そのため、SDGs達成に向けて主体的に学んでいく手立てとして、個別最適で協働的な学びの一体的な充実を図りながら、ESDの視点を取り入れた学習指導を促進する社会科学習の授業づくりを行った。

個別最適な学びとして「自由進度学習」を取り入れたことで、児童の学習進度が把握しやすくなり、個別の声掛けや支援が一人ひとり丁寧に行うことができた。また、学びの個性化においても、自然とロッカー付近で友達と集まって学び合う姿が見られたり、椅子の上にノートを置いてワークシートに取り組む児童が見られたり、それぞれが学びやすいスタイルを見つけ学習ペースを自分で調整しながら主体的に取り組む姿が見られるようになった。家庭学習においてもSDGsを取り上げた内容の学習に取り組む児童も見られるようになり、授業以外でも探求しようとする意欲を向上することができた。自由進度学習に対する感想アンケートからも「自分のペースで進めるのが好きなので、とても良かったです。友達と意見交換もできたし、ワークシートでまとめてあるところが、わかりやすさ・やりやすさを引き出していました。」などの意見があり、個別最適な学習としての自由進度学習の取り組みは効果的であったと言える。課題としては、ICT機器の操作において個人差が見られ、何度か操作ミスのため時間をロスしてしまう児童がいたことや、ワークシートを終えるだけで精いっぱいといった支援の必要な児童がスペシャル問題へ進めずにいた点が挙げられる。児童の実態を踏まえた教材開発・学習形態の工夫や場の設定など、まだまだ改善する余地があることに気づいた。

協働的な学びとして「縄文・弥生・古墳時代、どちらの時代に住みたい・住みたくない」をテーマに、理由を考えESDの視点で解決方法を話し合う活動では、自然と児童のつぶやきが聞こえてきて意見交流が始まったり、支援が必要な児童をサポートしながら意見交換したりするなど、学級の学び合う雰囲気向上にもつながっていると感じた。また、さまざまな意見を交流することを通して、質問し合う姿や考え方を見直している姿が見られたことから「多面的・総合的に考える力」「コミュニケーション力」「批判的に考える力」が高められたように思われる。さらに、このような協働的な学びを、他教科へも繋げていくことで、連携性や公平性と言ったESDの見方・考え方も高められていくと考える。しかし、住みたくない理由に対する解決方法を考える活動に関しては、具体的にどのようにすればよいのか思いつくことができなかつた児童が30名中9名もいたことから、じっくりと考える時間を確保するために授業内容を精選することや、SDGsに関する17の目標だけでなく、その中にある169のターゲットに関しても触れていく時間をとる必要があると感じた。また、日頃の会話の中にも意識してターゲットの話をしたり、価値観や行動面での判断力を確かめるような問いかけをしたりすることで、今後の生活で直面することになる課題に対して改善策を考えられるようにしていきたいと思う。

社会科の授業では、問題解決型学習に取り組むことで、歴史という既成事実に対して「何で?」「調べてみたい!」と、当たり前の事実の中から疑問を見つけ出す視点を意識づけることができた。また、学習する中で発見した課題に対して、自分だったらどのように解決すればよいか「協働的な学び」を通して、知識と経験を結び付けながら解決策を探そうとする力を伸ばすことができた。さらに、ESDの視点で学習内容を見返しながらふりかえりを書かせてみたところ、SDGsの17の目標と調べて分かったことを見比べながら、自分なりにSDGsとどのように関連しているか意見を書いている児童が多かった。

検証授業後のアンケートでは SDG s の必要性について「これをみんなが守れば世界が平和になるから」「みんなが安心してくらするようになるため」など、自分ごととして考えた意見だけでなく、自分を取り巻く社会や環境を良くしようとする意見が多く挙げられていた。さらに、SDG s の取り組みについても検証後は「海に落ちているごみを拾っている」「ご飯を美味しく食べるようにしている」「ごみの分別をして捨てている」など、具体的な取り組みをしている児童が 67%から 76%へ向上していることから、SDG s に対する価値観や行動の変容に関しても良い結果となっている。

以上のことより、個別最適で協働的な学びの一体的な充実を図りながら、ESD の視点を取り入れた学習指導を促進する社会科学習の実践は「持続可能な社会の創り手」を目指した学習として効果があったといえる。

IX 研究成果と課題

1 研究の成果

- (1) 個別最適な学びとして「自由進度学習」を取り入れ、「学習の個性化」として、個人・ペア・グループ学習の選択、学習場所の環境を工夫することで、子ども達が主体的に学びに向かうようになり、自分で責任をもって学習を調整しながら学習目標をクリアすることができていた。また、ワークシート、ミライシードなどを活用し、子ども達の学習状況を把握しながら「指導の個別化」として机間指導を充実したり、支援の必要な児童への対応に余裕をもって接することができたりするなど、学習内容の定着を図ることができた。
- (2) 協働的な学びとして「パフォーマンス課題」を取り入れ、話し合い活動において互いの考えの理由・根拠に SDG s を関連付けて考えることができるようになった。また、意見交流をする中で考えを変容させることができるようになるなど、ESD で育みたい「批判的に考える力」「多面的・総合的に考える力」といった資質・態度につなげることができた。
- (3) ESD の視点に立った社会科の授業実践を通して、全ての児童が「SDG s の 17 の目標」に対して基礎的な知識を習得することができ、自分ごととして今までの生活を振り返りながら価値観を見直す発言が増えたり、SDG s を意識した取り組み意欲が向上したりするなど、価値観や行動の変容が見られるようになった。

2 今後の課題

- (1) SDG s と関連させながら意見を書くことができるようになったが、授業の中で発見した SDG s の課題に対して、なぜそのような事が起こっているのかという背景にまで深く迫る時間がとれず、うまく解決策を考えられない児童が見られた。今後は、多様な価値観をもった人々がいることや、社会や経済の仕組みがあることにまで気づかせながら授業を進めていきたいと思う。
- (2) 今後は、学校全体で ESD について共通確認を図りながら推進することの必要性を感じた。

〈主な参考文献〉

- | | | | |
|----------------------------------|---|------------|--------|
| 難波駿 | 『超具体！自由進度学習はじめの一步』 | 東洋館出版社 | 2023 年 |
| 及川幸彦 監修 大牟田市 SDG s ・ ESD 推進委員会 著 | 『理論と実践でわかる！SDG s / ESD 』 | 明治図書出版 | 2021 年 |
| SDG s 不東会×银杏倶楽部 編 | 『ESD の授業づくり』 | 京阪奈情報教育出版 | 2021 年 |
| 養手章吾 | 『子どもが自ら学びだす！自由進度学習のはじめかた』 | 学陽書房 | 2021 年 |
| 文部科学省 | 『小学校学習指導要領解説 社会編』 | 日本文教出版株式会社 | 2018 年 |
| 文部科学省 | 『持続可能な開発のための教育 (ESD) 推進の手引き (令和 3 年 5 月改訂)』 | | |

https://ap.ice.or.jp/_wakaba2013/_docs/contents/shidoan/2011/g11-0110/g11-0110.pdf

2024 年 5 月 1 日アクセス

本検証授業研究会の記録

本検証授業実施期間日：令和6年7月2日（火）

検証の観点	<p>①自由進度学習で学んだワークシートやスペシャル問題などをふりかえりながら、自分の主張する意見の理由・根拠を考えることができるか。</p> <p>②「話し合いのルール」を守りながら、相手にわかりやすい話し方で自分の考えを伝えようとしているか。また、聞き手は相手の意見を聞きながら意味を理解し、疑問に思ったことは質問しようとしているか。</p> <p>③歴史の変化に関して、SDGsの目標と関連付けながら理由を考えることができるか。</p>
-------	---

1 研究協議

- 授業者 個別最適・協働的な学びとして自由進度学習を取り入れたが、学習内容の定着を心配し過ぎてワークシートを増やしてしまいスペシャル問題に進めない児童がでてしまった。SDGsを常に意識させながら授業展開を進め、子ども達の意識を高めることができた。
- 所長 これまでは社会の授業といえばチョーク&トークの授業のイメージであったが、子どもたちが活発になる授業であったのではないか。
- 参観者 発問の直後に「弥生だよな！弥生がいいよな」と伝え合う児童の姿が見られた。また、SDGsの視点も加えて話し合いをしていた（消去法をつかって）「やっぱりSDGsの2番だよな」とよく考えて話していた。
- 参観者 授業の雰囲気がよく、みんながいきいきとしていた。新たな疑問に気づく場面やガッツポーズをする場面など、すごく楽しそうな授業だった。
- 指導講師 子どもたちに自由にさせているけどテンポが良い。授業展開のストーリーが作られていて子どもたちも乗せられていた。45分という授業の中でテンポは大事である。

2 講評

琉球大学国際地域創造学部准教授 大島 順子

- (1) 今回の研究は単元9時間全部の授業を見てみたいと思わせる魅力が詰まった研究内容であった。SDGsを教育現場でどのように取り扱っていくのか迷っている現状において、SDGsで学習単元のねらいをより深化させることに向き合った検証授業といえる。持続可能な社会の創り手の育成を目指す現在の教育課程の中でSDGsを通して現代的課題を学ぶこともあるが、活用の仕方は多様で工夫が求められている。また、SDGsの登場は学校教育活動を活性化させるものとして積極的な活用が期待される。
- (2) ESDや個別最適で協働的な学びを進める上で、自由進度学習を取り入れたことは評価できる。支援が必要な児童が意欲的に取り組めるようになり、一斉授業ではできない一人ひとりの学びの深化がみられた一方で、個人の変容をみることについて時間内での授業運営の限界が今後の課題になってくる。また、授業全体の見通しや時間的な目途を持たせることも必要である。
- (3) SDGsを社会科の歴史で、各時代の違いをSDGsのめがね（視点）で考えるというアプローチは子どもたちのSDGsに対する議論の深まりを導いたと言える。変えることができない事実としての歴史に対して現代的な指標であるこのSDGsをどう関連づけさせるかについては、ただ17項目を貼り付けるだけでは不十分である。環境・社会・経済と学びを繋げて整理したり、この科目だけでなく、それ以外の教科で横断的に繋げたりすることで、ESDの考え方に沿った教育の実践となる。